

令和5年12月7日移動教育委員会・意見交換記録（51会議室）

○教員を目指そうと思ったきっかけは何か。

（参加者）子供が好きで英語を教えたいと思った。小学生のとき、チョークで黒板に文字を書くことに憧れがあった。

（参加者）中学校3年生の時の担任の英語の先生に憧れて、その先生のようにになりたいと思った。教育実習を経験して、改めて教員の良さを実感した。

（教育長）教育実習はどうだったか。

（参加者）小学校で3週間、中学校で2週間教育実習を経験した。授業数は他の学生より少なかったが、授業研究に力を入れて満足いく授業ができた。中学校では、学年主任の先生の授業を見て、プロフェッショナルのすばらしさを感じた。中学校は少し忙しい様子が見られた。小学校は、放課後の職員室の雰囲気が良いと感じた。

（参加者）私は子供時代かまってほしい気持ちの強い子供だったが、小学校6年生の時の担任の先生が根気よく毎日しっかり向き合ってくれたことが教員を目指すきっかけとなった。人として憧れている。また、下級生の友達に勉強を教える機会があり、その時教えることの魅力を感じた。

（参加者）体育の授業でドッチボールをすることが仕事になるのは魅力だと思う。

（参加者）今はまだ漠然とした気持ちで教員になる実感はない。数学ができるのはかっこいいので、高校の数学の先生が良いかなと思っている。安定した仕事に就きたいという思いもある。

（教育長）数学は、授業の中で発見する喜びがある。数学の定理など偉人が発見したことを体験出来るのも楽しい。

（参加者）小学校・中学校で巡り会った先生が良い先生ばかりだった。みんな楽しそうに働いていると感じた。教育実習を通して、やりがいを感じられる仕事は教員しかないと思った。

(参加者) 中学校2年生3年生の担任が良い先生で、人としてこういう大人になりたいと感じた。教育実習で小学校1年生を担当し、さっきまでひらがなが書けなかった子が書けるようになり、成長を感じられたのが良かった。

○浜松の学校、浜松の教育にどのようなイメージを持っているか。期待、希望はあるか。

(参加者) 浜松市出身だが、他市に5年間住んでいた。他市で通っていた学校は、あまり雰囲気は良くなかったが、中学校2年生で浜松市の中学校に戻ってきたとき、校内にゴミがなくて驚いた。また、先生も生徒もあたたかく迎えてくれてうれしかった。

(教育長) 学校と家庭、地域が連携・協力して学校や地域の環境を良くしてきた成果だと思う。

(参加者) キャリア教育に魅力を感じている。授業の中で、子供の資質能力を育てていくという教育方針に期待している。

(教育長) 変化の大きい予測不能な社会を生きる子供にとってキャリア教育というのは大変意義があると考えている。期待していただき、一緒に子供の基礎的汎用的能力を伸ばしてほしい。

(参加者) これまで他県に住んでおり、浜松に住むようになったのは最近である。教育実習で小学校4年生を担当して、お互いを思いやれる子供達、初めて会う実習生の私のことも迎え入れてくれる子供達の様子を見て、こういう子供を育てたいと感じた。

(教育長) 昨年度、いじめに関する問題があったことから、改めて人との接し方を意識するよう教員に伝えている。皆さんが先生になったら、思いやりや気遣いをもって接することを意識してほしい。

(参加者) 浜松愛というイメージを持っている。浜松市は働き方改革を進めていて、教員が休職せず、助け合って風通しの良い職場環境だという点に興味を持った。

(教育長) 人間関係等の職場環境はそれぞれの学校によって異なるが、浜松市では、法に定められた教員定数に加えて人材を独自に配置している。そういった点では教員の働く環境に対するサポートは充実していると思う。

(参加者) 学生時代は吹奏楽をやっていた。浜松は音楽の街で、子供達がアクトシティ

浜松に音楽を聴きに行く行事があるのがとても良いと思う。また私の妹が通級指導教室に通っていたがサポートが手厚いと感じた。

（教育長）アクトでは世界的なコンクールも開催されており、浜松市は文化の面でも充実している。通級指導教室のサポートのほか、不登校の子供を対象とした「まなびの教室」など、さまざまな支援を行っている。

（参加者）ずっと浜松で育ち、不自由なく充実した学生時代を過ごすことができた。教育実習では、先生方の協力体制がしっかりしていると感じた。また運動会などの行事の時は、地域の方も協力してくれて一緒に子供を育てているという実感があつた。

（教育長）教育実習では、ベテランの先生の感覚と世代間のギャップなどを感じることはなかったか。

（参加者）そういったことを感じることはなかった。

（参加者）私は他県出身で海がないところで育ったが、浜松市は、海も山もあり、交通の便もよく、また地域に大企業もあることから、地域がもつ教材の多さが魅力だと思う。

○教員を目指すうえで聞きたいこと、不安に思っていること。

（参加者）教員の負担が大きいという話をよく耳にする。部活動は今後、地域移行していくということだが、休みの頻度などはどのくらいか。また、不登校の子供への対応や、複雑な家庭環境の子供・保護者からの相談への対応など不安がある。

（教育長）現在、中学校の部活動は平日週5日のうち1日は完全休養日、土日の活動はどちらかで3時間程度というルールで活動している。今後、部活動を地域移行していくことも含めて、検討をしている。また顧問は複数教員で担当するなど、以前よりも負担や拘束時間は少なくなっていると思う。また、不登校の子供への対応については、校内や校外に不登校の子供が通う教室を設置して専門の支援員を配置している。担任だからとすべてのことを一人で抱える必要はなく、それぞれ担当支援員や専門家と協力してチームで対応している。いじめ問題にしても、子供からのサインを見逃すことの無いようICTを活用して様々な方面にアラートが届くような仕組みを構築している。

（参加者）教育実習では保護者と接する機会がなかった。保護者対応で大切にすべきことは何か。また挫けそうになったとき、どう自分を励ましたらよいか。

（教育長）保護者対応は1人ではなく、ベテラン教員や先輩教員と対応することが大切である。その姿を見て学んでいけばよい。悩みごとは、同期と励まし合ったり、周りの教員に遠慮せず相談したりしてほしい。

（黒柳委員）保護者はやはり我が子が一番大切なため、頭に血が昇った状況で学校へ連絡してくるので、一旦受け止めて良く話を聞くことが大切だと思う。初期対応、電話対応が一番重要である。

（山本次長）初任者研修では、悩みごとを相談する研修があり、きちんとサポートしていくので安心してほしい。また、一緒に研修を受ける同期とお互い相談し合ったり励まし合ったりして、自分だけでなく皆が悩んでいると思って乗り越えてもらいたいと思う。保護者対応は、半分はベテラン教員や先輩教員の姿を見て対応を学び、半分は人間性が大切なので、自身の人間性を磨いていただけたらと思う。

（参加者）社会人になるにあたって一番大切なことは何か。

（教育長）情熱と愛情が大切である。

（川副補佐）浜松市教員育成指標に示される「教育的素養」が参考になると思う。教育への情熱と愛情のほか、コミュニケーション能力や多様性を尊重する人権意識、たゆまぬ自己改革、公務員として必要なコンプライアンスなどが大切である。

（参加者）多様性を尊重することと、学びを進めることのバランスに苦慮している。浜松市の補助員等の体制はどのようになっているか。また、学校の始業時間は何時からか。

（教育長）配慮を要する子をサポートするスクールヘルパーを各学校に配置している。ただ、学校内で同時に複数の配慮が必要な子供を見なければならない状況があるため、補助員が不足している現状はあると認識している。浜松市の学校では、始業時間は8時から、授業開始時間が8時25分から30分という学校が多い。

（参加者）音楽の先生は各学校1人だと思うが、授業づくりに悩んだらどうしたら良いか。

（教育長）教育研究会という場が年に数回ある。そうした教科ごとの研修の場でネットワークを広げて、遠慮せずに先輩教員に相談してほしい。

（黒柳委員）以前、養護教諭の講師をしていた経験があるが、近隣地域の学校が集まる研修会等で相談したり、知り合いを増やしたりして相談に乗ってもらっていた。

（川合指導主事）こうした会に参加していただいたことは教員を目指すための第一歩である。これから開催するイベントでは先輩教員の声を直接聞ける機会があるのでぜひ参加してほしい。

（教育長）教員を目指す皆さんの意見や考えを聞いて、こちらも勉強になった。とても良い機会をいただいたと思う。ぜひ浜松市の教員になって、子供達のために一緒に働いてほしい。

令和5年12月7日移動教育委員会・意見交換記録（53会議室）

○教員を目指そうと思ったきっかけは何か。

（参加者）兄は他県の中学校で英語の教員をしており、母は地元で発達支援補助員をしている。教員のやりがいや楽しさを聞く機会が多いため、学校で働くことを身近に感じている。

（参加者）音楽教育に興味がある。中学生の頃から他市で小学生の金管バンドの打楽器指導に携わってきた。子供たちの演奏がだんだん上手くなったり、リーダーになったりしていく様子を見て、もっと長いスパンで子供の成長に関わりたいと思ったことがきっかけである。採用試験では、発達支援推進教員の試験を受験した。子供のつまづきを早期に発見して、適切な支援をすることに関わりたいと考えている。

（田中委員）ご自身では何か楽器を演奏されるのか。

（参加者）ピアノの弾き語りが趣味である。

（参加者）小学生のときの担任の先生に憧れを抱いたことがきっかけである。大学の授業等で本格的に子供と関わるうちにやはり子供が好きだと感じて、先生になろうと思った。

（参加者）明確な理由はなく、なんとなくやりたいと感じた。小学生の頃はチョークで黒板に文字を書くことに憧れた。家の前が小学校で、笛の音やピアノ、子供の遊ぶ声を聞いて過ごすことに慣れている。現在は、大学の授業で教育について学びながら、野球を通して地域の子供達と関わっている。今年の採用試験は力が及ばなかったが、来年もがんばりたいと思う。

（参加者）浜松の街がとても好きで、地域活動でお祭りや防災訓練などを通して子供と関わり、子供が好きだと感じたことから浜松市の教員を志望した。

（参加者）小学校の時の担任の先生が、良いことも悪いことも一つ一つ真剣に向き合ってくれた。良いところをどんどん伸ばしてくれて自分に自信がついた。私も子供達が自信をもてるように良いところを伸ばしてあげられる先生になりたい。また、4つ下の妹が、小学校4年生のときに学校に行けなくなってしまったことがあったが、担任の先生

が真剣に話を聞いてくれた。そういうサポートができる先生になりたい。

(参加者) 部活や家庭で悩んだ時、先生が支えてくれた。大学では、野外教育ボランティアでさまざまな子供との関わり、もっと長いスパンで子供達の成長を見守りたいと感じた。ボランティア活動には、不登校の子供も参加しているが、さまざまな理由でつまづいたり悩んだりしている子供のサポートがしたいと考えている。

(安田委員) 7人中5人が浜松市出身ということですが、皆さんから、関わった教員に憧れを持ったことがきっかけになったと聞いてうれしく思う。浜松市出身の参加者の方も浜松市に縁があって今参加していただいている方もぜひ浜松の教員になっていただきたい。

○知りたいこと、聞いてみたいこと

(参加者) 特別支援推進教員の受験資格である特別支援学校教諭の免許状が、大学の在籍学部のカリキュラム上取得できなかった。発達支援学級の子供を社会に送り出すサポートをしたいと思うが、免許がなくても学校教育の中で携われるか。受験要件に今後教員経験何年以上で資格がとれる、というような案内はできないか。

(参加者) 特別支援学校教諭資格取得にかかる必要な単位が定められているので、それを通信大学等で取得すれば、資格がとれるのではないか。

(参加者) 採用試験を受験する時に、特別支援学級担任教員の経験何年以上ということが加点や資格取得になる制度はないか。

(中林担当課長) 免許状の取得要件は法令で決まっているため、資格取得要件を変えることはできないが、子供に向き合う気持ちがあれば、特別支援教育に関わることはできる。教員をしながら資格取得できる仕組みもあるため挑戦してほしい。

(小畑参事) 採用試験の加点にはならないが、特別支援教育に関する思いを論文や面接等で伝えてもらえれば意欲という面で認められることもある。免許がなくても発達支援学級の担任になることもできるし、実際に働きながら特別支援学校教諭の免許を取得している教員もいる。

(安田委員) 「浜松の教員になったらやりたいこと」として自己PRで伝えてほしい。特別支援教育、発達支援教育に関心を持っている学生が多いことは、これからの浜松の

教育にとって、非常にありがたいことである。浜松市では、発達支援学級やまなびの教室を毎年拡充しているため、そういった子供達をサポートしたいと考える教員が増えていくことは重要なことである。ぜひ頑張ってください。

(田中委員) 志をもって向き合っている大人のことを子供はよく見ているので、そういう気持ちを持ち続けていただきたい。

(参加者) キャリア教育に興味があるが、教員として働いている方に話を聞くと「そんな時間はない」と言っていた。さまざまな経験や体験が子供には必要だと思うが、試験のための勉強も必要なのでバランスが難しいと思う。浜松市は、今後キャリア教育をどのように進めていく考えなのかお聞きしたい。

(小畑参事) 浜松市の考えるキャリア教育は特別なことではなく、教科の学習を含めたさまざまな教育活動をキャリア教育の理念で整理していくという考え方である。授業の中で友達と話し合う活動を通して、新しい視点に気づいたり、ものの見方が変わったりすることがあれば、それはキャリア教育の「人と関わる力」が活かされたということであるし、そうした力が備わってきたと実感することができる。今、学んでいることが将来どう役立つのか気づいたときや、過去の学びと今がつながったときは、「先を見通す力」「学びをつなげる力」が育ったということである。職業体験や野外活動だけがキャリア教育ではなく、学校の様々な教育活動をこれから生きていく力にしていくにはどうしたら良いかという視点が浜松のキャリア教育である。教育活動のいろいろな場面でどんな力をつけさせようかと考えることから浜松のキャリア教育が始まる。模擬会社の経営を学んだりする学校もあり、それぞれの学校の環境や特色を生かしながらキャリア教育に取り組んでいる。学校のホームページを見ていただくと良い。

(安田委員) 「時間がない」と言っていた教員は、キャリア教育を大変なものだと捉えているようだが、自分で気付かないうちにキャリア教育を実践していると思う。

(神谷委員) 学校は、キャリア教育を主軸にして全体計画をつくっている。運動会などの行事をそうした考えのもとに開催している学校もある。浜松市の教育のベースになっている考え方なので、全く関わりのない教員はいないのではないかと。

(小畑参事) 皆さんが教育実習を通して子供達と関わってくれたことが「キャリア教育」になっている。教員を目指す学生の姿をみて将来への思いや憧れを抱いた子供もいるかもしれない。

○浜松の教育に期待していること、改善点など

(神谷委員) 小中学校の担任の先生の名前や顔は、50歳になっても思い出せる。それだけ記憶に残る仕事だということ。学生の立場から見て、浜松の教育に期待していることや改善点などはあるか。

(参加者) 私は浜松市の学校には一度も通ったことがないが、子供達の世界は家か学校、習い事くらいしかなかった。もっと外の世界と関わることができないか。もっと地域の人や企業の方などいろんな形で関われる機会があると良いと思った。また、特別支援学校は完全に分離しているが、もっと通常の学校とつながる機会を持って大人になったとき戸惑わずに関われるようになれば良いと思う。

(小畑参事) すべての学校ではないが、近くの特別支援学校と交流のある学校もある。2週間くらい地元の中学校で過ごして友達や地域の方と交流する取り組みをしている。いろいろな提案をいただけるのはありがたい。

(田中委員) 校長や教頭を志望する教員とお話する機会があったとき、地域の方と積極的に関わるようにしていると聞いた。防災訓練など地域の活動に積極的に参加して別業種の方と接することで見識が広がるという話をされていたので、自身の心の持ち方で世界は広がると思う。

(参加者) 不登校の子供が学校や社会に復帰したり戻ったりするための道すじがあると良いと思う。中学校2年生の頃、不登校だった時がある。適応指導教室にも行ったがあまり馴染めなかった。友人の中学校では、教室に行けない生徒は保健室に行っていたようだが、複数の生徒が同時に保健室に居られないため、時間制限があり、時間がきたら教室に戻るか自宅に帰るかしかなかったと聞いた。不登校になり、学校や社会とのつながりがなくなるとどこにも行けなくなってしまうので、復帰の選択肢が複数あると良いと考えた。また、特別支援学校や発達支援学級の子供への支援がもっと充実したら良いと思う。学校や教員は、客観的に子供の特性を理解して支援している場合がほとんどだと思うが、家族が特性を受け入れられないケースもあると思う。障害だからこうする、という案内ではなく、個性や困り感に対して効果的な声掛けや対応を紹介する情報提供できると家庭や子供が生きやすくなると思う。

(安田委員) 今の意見に対して他の皆さんはどう考えるか。

(参加者) 教育委員会や学校で多くの不登校対策を構じているが、不登校児童生徒の保護者はどのような意見を持っているのか。どのように考えているのか気になった。

(参加者) 私が不登校になった時は、親は学校に戻ってほしいと思っているようだった。休んでいいという親ばかりではないと思う。

(安田委員) 保護者によってそれぞれ意見や考え方が違う。子供が不登校になって保護者も苦しんで自分を責めることもあるし、不登校の理由を他に求める場合もある。不登校の要因はそれぞれ違って複数絡み合うこともあり複雑なので、一つ一つ時間をかけて向き合っていくしかない。皆さんのように、若い教員がいろいろな提案をしたり、不登校経験がある教員が寄り添ったりすることで良い方向に進むこともあると思う。

(田中委員) 不登校の要因は多様で複雑だというお話があったが、教員が一人で対応しなければならないわけではない。浜松市ではスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの専門人材や支援員・補助員を配置して一緒に対応したりサポートしたりしている。

(小畑参事) 校内のまなびの教室には、支援員を配置してそれぞれの子供の学びを支援している。保健室登校は学校の事情によって時間が限られるかもしれないが、保健室で過ごす子供もいる。この授業なら参加できる、給食は一緒に食べられるなど、その時々の子供の状況に支援員が対応している。また、教育支援課では年4回不登校の子供をもつ保護者の話を聞いたり悩みに寄り添ったりする会を開催している。学校により対応は異なるが、放課後なら学校に来られるという子に対応したり、家庭訪問をしたりしてできる限り一人一人の状態に寄り添った対応を心掛けているが、カウンセラーは各校週1回、スクールソーシャルワーカーは地域ごとに1人の配置など、いつでも頼れるという状況にはなく人手不足という部分はある。

(奥家部長) 教育委員会や教育業界で使用されている言葉は古い。「発達障害」という言葉を使うことで子供の個性や特性、といった意味合いが消えてしまう。「生徒指導」は「指導する」という強い言葉に反発を感じてもおかしくない。「不登校」は、ドロップアウトではない。学校に行けないときがあってもダメじゃない。学校現場が使う言葉はもっとアップデートされていいのではないかと感じている。LGBTは、男と女ではなくレインボーという言葉を使ってグラデーションを表現している。不登校かそうでないか、発達障害の子か普通の子かという判断ではなく、その間のグラデーションがあっていいと思う。これからは、もっとそういう感覚をもって発信をしていく必要がある。皆さんが感じたことは、学校現場でどんどん議論していただき、変化させていくことを

楽しんでもらえたらと思う。

○疑問に思っていること、不安に思うことなど

(安田委員) 疑問に思っていることや、不安に思うことなどあれば質問してほしい。

(参加者) 中学校の部活動は今後どうなっていくのか。先生の中には部活動をやりたい人やりたくない人がいると思うが、教育実習に行った地元の都市部では、部活動を地域移行している。その結果、採用試験の志願者が減少したと聞いた。

(安田委員) 国の方針で部活動の地域移行の方向性が示されているところである。

(小畑参事) 浜松市の部活動の今後の在り方について検討する会議のなかで議論を進めているところである。令和8年度を目安に休日の活動は地域移行する可能性が高い。自分の在籍している学校の生徒を指導することが喜びだという教員は多いが、種目によっては地域の指導者として関わっていくという考え方に切り替わりつつある。今後の方向性などについて、会議の結果を公開しているので注目してもらいたい。

(奥家部長) 浜松市には50校近い中学校があり、各学校10個前後の部活動がある。その部活動の指導や運営などすべてを地域に下ろしても担えるところばかりではないため、一律に地域移行ということではなく、地域のスポーツクラブや少年団、部活動そのものを残すなどいろいろな形のありようを探っていく。当初の目的は教員の負担軽減からスタートしているため、まずは学校の業務から部活動を切り離して、その後担い手をどうするかということを現在、議論しているところである。部活動の地域移行に関する会議は今年度始まったばかりだが、情報はHPで公開しているため関心があればご覧いただきたい。

(安田委員) 今日の会議を通して、浜松の教員への思いを新たにしていただけたらうれしい。教員の仕事は、人づくり、人間形成に関わるやりがいのある仕事である。ぜひ浜松の子供達を育て支える大人になっていただきたい。